平成30年1月30日　ポプリン喫茶スペース にて

園田（そのだ）　恵子（けいこ）さん

（社会福祉法人にぎやか会　ポプリン（①）所長）

京都府出身。当時の中主（現・野洲市）にあった作業所を退職した後、利用者と職員の立場が同じような作業所を利用者と一緒につくろうと平成十年に守山で小規模作業所を設立する（平成二十年度以降は、にぎやか会ポプリン）。多様化する福祉支援の現場で壁にぶつかるが、改めて教育や心理分野からのアプローチを学び、現場で実践している。

事業所として出来ることを

北川　ポプリンには高次脳機能障害の方であったり、様々な障害のある方がおられると思うんですけど、事業所として受け止める時の、園田さんの感覚ってどんな感じなのでしょうか。

園田　私は、他の事業所もいろんな人を受け入れていると ずっと思っていたので、あまり気にしていなかったんですけど、実際は、他の施設で断られることもあるんだなと、今はちょっとは思っています。ここでは、そういう難しい方についても、一度来てもらいます。そして、一週間とかですぐに契約ではなくて、長い期間で実習をしっかりしてもらって、ちょっと自信が持てた時に契約をしてもらうという感じですかね。来てすぐに「見られません」と、お断りはしたくないっていうこともあります。そういう方って、ご家族も障害がおありであったりとか、単身の方とかも結構多いので、なかなかすぐに「駄目ですよ」という風に言えないですね。そこはすごく考えているところです。拒絶されると、ご本人にとってもあまり良くないと思いますし。

①ポプリン・・・滋賀県守山市のにある事業所。就労継続支援B型・生活介護事業。

たぶん、過去に拒絶される経験がすごくあった方々だと思うので、できればそういうことはないほうがいい。病状が悪化して、長期入院で通所できないとか、そういう場合はまた別ですけどね。こちらで見られないから、もう無理ですということはできるだけ避けたいなとは思っています。

北川　そんな中で、五十名以上の利用者の方がおられるということは、いろんな人がポプリンに来られているんですね。

園田　そうですね。でも、五十人を凝縮すると三十名ぐらいになると思うんです。一日だけとかで、そんなに毎日来られない方もすごく多いです。引きこもりの状態にある方で、精神科のほうから日中の居場所として利用したいという方も結構おられます。そういう通所日数が少ない方もたくさんおられるので、契約人数はそうなんですが、実際は、なかなか受け入れ先というのが少ない現状があります。

北川　日中の過ごしの場所ですよね。ちょっとずつ自立訓練の事業とか出来てきていますけど、以前はそれもなかったですよね。

園田　そうですね。でもちょっと家を出る機会があると、

ずいぶんご家族も安心されたりとか、本人も外へ出ることができて、ちょっと働くことができるのは大事だと思います。工賃は少ないですけど、来た分は貰えるということで、少し自分を認めてもらえたり、そういう機会に少しでもなればいいなという思いで来てもらっています。そこで人数が多くなっているというところはあります。でも、スペースにもさすがに限界があるので、場所を少し分けてというところで、今後、進めていくことになると思います。

北川　多機能の良さもあれば、多機能の不便さもたくさんあるんじゃないですか。

園田　そうなんです。工賃に差をつけられなくて。B型と生活介護といっても、正直なところ、利用者さんは全然意識されてないので、一口にB型と言っても、本当に幅が広いですよね。

北川　そうですね。就労から活動や療養まで。

園田　そう。それに、生活介護の方で、例えば、支援区分が3とか4でもB型にどうしてもして欲しいということで来られている方もいますし、むしろ、生活介護の方のほうが出席率が高かったりとかね。たとえばB型で精神障害の方は、長期に休まれたりとか、時間を決めてもなかなか作業に入れなかったりということもあるので。必ずしも生活介護の方が仕事ができないということでもないと思います。だから、区分もなかなか難しいところがありますね。特に、精神障害の方は、季節で波があるし、一日の中でもすごい気分の変化があったりして、なかなか作業を続けるというのが難しい方もたくさんおられます。B型の方は、すごく作業ができる方からほんの少しまでと差がかなりあります。幸い、うちのお菓子づくりって、泡立て以外は機械を使ってない手作業なので、誰でもその日に参加できる。そこは、いいところなのかなと思います。力に差があっても、ずっと一人でこれだけ混ぜてくださいよということもないので。これが、機械化すると機械が使える人しかそこに関われなくなってしまう。だから、こういうデジタル化の時代にアナログな作業も、障害特性を考えると、やはり必要じゃないかなとは思いますね。あと、手作業のほうがお菓子は空気の入り方もすごく上手くいくので、ちょうどいい感じですね。

建物の記憶を引き継いで

原田　この畳のお部屋、とても落ち着きます。

園田　この建物の一階は昔、酒屋さんだったんです。ここから四百メートルぐらい先に酒屋さんの蔵もあったんですけど、ポプリンが建物をお借りした時には、廃業されてい

ました。現在は、その蔵もすべてなくなってしまいました。廃業される前は、「金盛」というお酒を販売していたんです。ここは金森町なので、金が盛えるという、そんないい名前のお酒をずっと造っておられたんです。一階部分は、造ったお酒と、地酒と、他にビールとか、いろいろ販売されていました。そこを、その当時、七十代の酒屋さんのお母さんが一人で細々と営業されていたんですが、彼女が病気になって酒屋をやめるということで、ここを借りないかと偶然紹介してもらいました。店を閉めるのを見るのは寂しいので、自分はもうやめるんだけれども、私達に使ってもらって開いていると嬉しいということで貸していただきました。

原田　そんな所縁があったんですね。

園田　実はその方には、三人兄弟のお子さんがおられて、そのうち二人は若くして亡くなっていたんです。次男の方も亡くなられ、誰も住んでいなくて、ここの二階は倉庫になっていたんです。下の三男の方は、たぶん美術大学に行かれていたのですが、ご病気でもう早くに亡くなられて。それで、ここを借りる時に、二階を見せてもらって部屋の押し入れを開けたら、絵がびっしり入っていて、引っ越しはまずそれを出すところからでした。絵の量がすごかったです。絵って、その方の心がすごく表現されているので、押入れを開けた時は、すごいびっくりしました。正直怖かったです。それを片付けるのが結構つらかったですね。それに、その部屋が奥の部屋なので暗いんですよ。だから引っ越した時は、その部屋に真っ先に一番明るい電気を付けました。

原田　人の歴史を感じますね。

園田　その歴史あるお酒を造っていた蔵で、ここが本当に唯一残った場所です。ここにその家族も住んでおられた。その歴史の上に今いるといいますか、そういうことも大事だなと思います。そういう方が住んでいて、そのあとを引き継いで。酒屋の彼は、今はもう亡くなってしまったけど、似たようにそういう色んなことがあった人が、ここに通っている人の中にもいる。そういう意味では、ここも、そういう困った方がいろいろ来られて、少しでも役に立てる場所にさせてもらえたらいいのかなと思いまして。

北川　園田さんは、なんでも受け入れられますね。その縁もそうですし、その環境もそうですし、今、利用者さんに対しても。それは、園田さん自身の性格的なものだったりするんでしょうか。

園田　どうでしょう。でもこの間、建築家の安藤忠雄さんが「こころの時代」に出ておられて。「《しゃあない》を生きぬく」かな、何かそういうタイトルだったのですが、確

かに私もそう思うんです。いろいろあったことはしょうがない、ですよね。だからそういうところで、まあ、しょうがないけどいっぺん来てもらおうか、みたいな。やってみて駄目だったら、また考えればいいかなとか。結構、そういう大枠なところがありますかね。

まだまだ、勉強中ですね

原田　園田さんが最初に福祉のお仕事に就こうと決めたきっかけは何だったんですか。

園田　就こうって思ったのは、実は、私自身の弟が、結構重い統合失調症でして、作業所の仕事をする前にもいろいろ事件を起こしまして、裁判になって、そういう本人の病状について、証人喚問を誰か頼んで欲しいと言われた時、なかなか引受けてくれる方がいなかったのですが、当時、弟が通所していた、京都にある作業所の所長が引き受けてくれたことですごく助かりました。そういう困った経緯が過去にあって、ここで今自分ができるものなら取りあえず何でもやろうというのは、やっぱり家族との中からの経験もあります。自分が将来的に弟を引き受ける時、何の知識もないよりは、ちょっとでも分かっていたいという思いから、この仕事にしてみよう決めました。

原田　今まで、福祉から離れようと思ったことはありますか。

園田　なかったですね。それよりは、より理解するにはどうしたらいいかと、もう一度分からないところを自分で勉強を始めました。私実は、五十歳になった時にもう一度大学へ行ったんです。

北川　それはすごいですね、行動派というか。

園田　ポプリンには、元々虐待を受けていた方が、結構おられるんです。はじめは、それぞれの障害特性というところを考えるんですが、実は元々ある障害より、むしろ被虐待児さんだったことのほうが問題が大きかったりします。最近は、障害者虐待防止法も施行されて、そういうこともクローズアップされてきていますけれども、以前はその問題があんまり支援のところでは出てこなかった。それで私は、小規模作業所で虐待を受けてきた方を十年間見てきて、壁にぶつかったんです。どう支援していけばいいのかというのが本当に分からなくなって、そこで、大学に行くことに決めました。龍谷大の教育学科が教育と心理と両方勉強できたのでそこに結局、七年ぐらいいました。卒業して、またさらにちょっと単位をとろうと思って、その後に、放送大学で単位を取って認定心理士の資格を取りました。知識はイコール技術だと思うんですけど、それは、その人を

理解する上ですごく必要なことだなと思うようになりましたね。それで、以前よりは少し分かるようになりました。

原田　お仕事が終わってから大学に通われていたということですよね。なかなか簡単に出来る事ではないと思います。

園田　みんなにも、「よくそんなこと出来ますね」とか言われましたけどね。でも意外に、良かったです。仕事が終わって、何々作業所の何々さんというラベルがなくなって、単に学生として勉強できたので。それと、担当の教授からひどく叱責された経験は良かったなと思います。年齢を重ねると注意されたり、怒られることも無くなりますので、一度すごく怒られた時は、同じゼミをとっている看護師さん達から、あまりにかわいそうやと思われて、まんじゅうをもらって、「これでも食べたら」と言われたことがあります（笑）。いい経験でした。別の心理学の先生からは、「園田さんは苦学をされているから」としょっちゅう言われていました。私、それの意味が分からなかったんですよ。私自分でそんな苦学しているっていう感覚なかったので、いつも何言うてはんのかなと思っていたんですけど、でも、やっぱり大変やと思ってはったみたいで、苦労して学校来ていると思われていたみたいです。

北川　たぶん周りから見たら苦じゃないかなと思うことを園田さんは苦に感じないんでしょうかね。

園田　そうなんですかね。今は、絵画療法をちょっと勉強しています。利用者さんで虚言癖のある方がいて、何か少し悪いことをした時に聞いても、絶対本当のことを言わないんです。だから、そういう人にはあまり長々と話をしたり、小言を言うことは効果がないというのは分かってきました。絵画療法は、非言語化の療法ですから、心を別のことで表現することで本人の気持ちをちょっと汲み取るんです。

北川　その方の虚言癖のところに、何か感じるものがあって、してみたいと思われたのですか。

園田　そうですね。専門の先生からアドバイスをもらって、絵を一緒に描いてみて、例えばその絵を一緒に見て、「これはどんなこと描いたのかな」とか、「これはこんな風にきれいに描けたよね」とか、「これは何の表現？何を意味しているか？どんなことを考えて描いたの？」とか、そういうことを聞き取ることで、その人の心を読み取るということがちょっとはできるので、そういうことでもう少し進めていきたいなと思っているんです。注意したり、怒るのは全然効果がなくて……本当にこっちが疲れるだけ。それよりは違うところからのアプローチでもうちょっと考えていきたいなと思っていて、それをもう少し進めてやれたらなと思っています。何かそういうのって、こういう作業所

でのかかわりの中ではあんまりないように思うんです。

北川　福祉の専門性がそういうところに詰まっている気がしますね。

園田　ある利用者の方は、絵画療法だったり、英語を習いに行ったり、いろいろしてもらったんですが、最終的に残ったのはダンスだけなんです。北村成美さん（②）も、みんなをやる気にさせる声掛けとかが、やっぱりすごく上手だと思うんですよ。みんなが先生に「ありがとうございました」と、ちゃんと挨拶している姿を見て、すごいなと思って。私、うちの利用者さんであんな風に言ってもらったこと一回もないですから。やっぱり自分がやりたくてやっているから、ああいうこともちゃんとできるんだろうと思います。それぞれの障害児でも本人達が表現者になりたいという気持ちがすごく強く感じられますね。

北川　「ありがとうございました」の場面を見たことありますが、素敵ですよね。

園田　自分がダンスをやりたいからということで続けておられるんで、そこはうまくいったのかなと思うんです。そういうものが複数、もう少し他にも見つけられたらいいのかなと思います。ただ、ダンスだけだとしても、課題はいろいろあるので、なかなかまだ、全部はうまくいかないです。でも、それを考え続けるのがこういう仕事やと思います。途中で見捨てたりとか、諦めたりとか、そういうことなしに続けていくことがこういう福祉の仕事じゃないかなと思うんですよね。福祉といっても、ほんとに人を見る仕事だから、教育的な部分もあったり、人の心を考えるのは心理でもあったり、いろんな重なり合っている部分がありますし、そういうところで複合的に一人の人を見ていく必要があるのかなと思います。それぞれの利用者さんの可能性を、将来に向けてどうしていってもらうかっていうところを考える仕事でもあるのかなと思うんです。

今後の話……

北川　今後の展開や課題などがあれば、お聞かせください。

園田　やはり、単に障害特性だけではないところで課題を抱えている人をどう見ていくか。地域でどう暮らしてもらうか。滋賀県でも虐待の件数がかなり増えたとニュースで言っていました。被虐待児さんのなかには障害を持っておられる方も結構多いので、そこをどういう風に、低年齢の時に見てもらうかというところを、これから本当に考えないといけないんじゃないかなと思います。児童養護施設に入っておられる方は、ある程度は育ち直しみたいなこともできておられるだろうと思うんです。そうでなく、虐待が

あってもそのままの家庭で育っている場合に、障害を持っておられるお子さんを育てる大変さからの虐待事例も上がっていますし、ご家族が障害をお持ちで、常時虐待があって成長された事例もあります。そういう方についても、どれほど認知されていて、どういう支援があるのかということも、私もまだ調べたことがないし、あまりそういうのを聞かないです。被虐待児さんにも乳幼児から児童の間の早期に関わりを持っていただいて、うちに来られている方みたいに壁にぶつかってすごくつらい思いをされている方のしんどさを、少しでも軽減できるような、そういう支援をしてもらえればなっていう風に思います。

北川　たしかに、育ってきた環境や背景がすごく影響しているような感じがします。こういった話などを若い職員さんに、園田さんからお話される機会もあるんですか。

園田　そうですね。特別改めてということじゃなくて、いろいろ日常的に話をしています。ケース会議というのも月一回はするんですけど、日々刻々といろんなことがあるので、そういったこと以外でも何かあったことはすぐに他の職員さんにも伝わるように心掛けるようにしています。

通院されている方もたくさんおられるので、ちょっと難しい方については、作業所で一緒に通院等行かせてもらっているんです。本人が伝えることと、実際のところとの差がすごくあるので、月に一回支援員が内容をまとめて行っています。最近の様子をきちっと伝えないと先生にも分かってもらいづらいのです。とても細かい支援というのが、やっぱり難しい方には必要になってくるので。

北川　世間の作業所のイメージは、みんなが一斉に作業をやるイメージがありますが、実はそうではなくて細かい支援場面も日々ありますよね。

園田　ちょっとトラブルが起こったら、その都度相談支援の方も来てもらって、行政の方も来てもらって、一旦そこで相談してどうするか決めたりとか、そういう直接支援の人がすぐに集まれるような体制も必要やなと思いますね。作業所だけで決めるんじゃなくて、支援者同士が繋がりいろいろ検討して進めるというのは、やっぱりないといけないなと思います。後で「そんなん知らなかった」、「私はこう思ったのに」という風にならないように共通で詰めていくというのは、やっぱり大事なところでしょうね。

②北村成美・・・ダンサー・振付師。滋賀県で、知的に障害のある人を中心に活動する湖南ダンスワークショップのプロデューサー。

北川　利用者の方が五十名以上いて事業所がまとまるのはすごいですね。

園田　やっぱり利用者の方達が暴れたりとかはたまにありますけど、それがすごい事件になったりとか、そんな大きな問題になったことは幸いないです。駄目な時は、もう警察を呼びますし、錯乱状態になられたりしたら、もう保健所に来てもらいます。今までは事業所で注意していたんですが、何時間話していても全然効果がないし、お互いにストレスになったりするので、それはもう「盗ったら一旦警察に行って話してもらいますね」ということにしています。

こちらで注意をしても、警察で注意されても、恐らく全然効果がないと分かっているんですが、ただ、物を盗んだら警察へ行かなければならないということの、その枠組みみたいなものは今まで作っていなかったので、少し変えて様子を見ているところなんです。病気の時は医療、お金の時は権利擁護で社協さんとか、いろんな枠を分かりやすく本人に提示して、混乱しないように仕組みを作るというのも必要です。随分前は全部作業所でやっていた時代もあるんですが、何かそんなことは分けて考えてもらったほうが本人も分かりやすいですしね。そうやっていろんな価値観の多職種が関わるって、これはもうほんとに大切ですし、これからもします。多職種が関わることで、ほんとに難しい方でも、作業所が見られないということがなく、継続して支援ができると思いますね。こんな時はあそこのあの人に、と相談できるというのはやっぱりすごく心強い。「ちょっと電話して聞いてみよう」とか、「駄目な時はまたちょっとお願いするかもしれない」とか、そんなことがベースで続けられているのかなと思います。

北川　それぞれがそれぞれの役割を発揮してくれると、やっぱりまとまった時にすごい力を発揮しますよね。

園田　ほんとにそうなんです。そして、もう一つ大切なことはね、否定的にネガティブなところを言うよりは、その人のいいところとか、楽しいところとか、面白いところに対して、できるだけ笑えるようにする。その人の話をする時に、暗くじゃなくて、「こんなんしょうがないよね」と笑って話せるのがいいなと思っています。

園田さんのお話をうかがって

「いろいろあったことはしょうがない」と語る園田さん。この園田さんの「しょうがない」には、少しもネガティブな響きがなく、私にはとても前向きに聞こえました。ポプリンの建物は以前は酒屋で、その歴史の上に今いるのだ、というお話が私は大好きです。いろいろあったその過去を受け入れて、そして現在に受け継いでいく。利用者の方に対しても、建物の歴史に対しても、これをごく自然にされているところが、園田さんのすごいところだと思いました。

インタビューのなかでは、大学での勉強のお話や、今学んでいるという絵画療法のお話もしていただきました。その時、園田さんの目がキラキラと少女のように輝いていたのがとても印象的でした。園田さんの知的好奇心が尽きることなどあるのだろうかとさえ思いました。もちろんそれは、勉強自体に対する好奇心というよりも、利用者の方をより深く知りたい、という思いの強さの現れなのだと思います。「元々の障害特性よりも、被虐待児であったことの方が問題が大きかったりする」というお話からは、自分も支援者として、特定の分野に捕らわれず、多様な視点を持っておくことの必要性を感じました。（原田）